

令和 3 年 5 月 2 6 日

食品安全委員会
委員長 佐藤 洋 殿

遺伝子組換え食品等専門調査会
座長 中島 春紫

遺伝子組換え食品等に係る食品健康影響評価に関する審議結果について

令和 2 年 3 月 3 1 日付け厚生労働省発生食 0331 第 20 号をもって厚生労働大臣から食品安全委員会に意見を求められた添加物「JPAN007 株を利用して生産されたヘミセルラーゼ」に係る食品健康影響評価について、当専門調査会において審議を行った結果は別添のとおりですので報告します。

遺伝子組換え食品等評価書

JPAN007 株を利用して生産された
ヘミセルラーゼ

2021年5月

食品安全委員会遺伝子組換え食品等専門調査会

目 次

	頁
<審議の経緯>	3
<食品安全委員会委員名簿>	3
<食品安全委員会遺伝子組換え食品等専門調査会専門委員名簿>	3
要 約	4
II. 食品健康影響評価	5
第 1. 安全性評価において比較対象として用いる添加物及び宿主等の性質並びに遺 伝子組換え添加物及び組換え体との相違	5
1. 従来 of 添加物の性質及び用途等に関する資料	5
2. 宿主及び導入 DNA	5
3. 宿主の添加物製造への利用経験又は食経験に関する資料	6
4. 宿主の構成成分等に関する資料	6
5. 遺伝子組換え添加物の性質及び用途等に関する資料	6
6. 安全性評価において検討が必要とされる遺伝子組換え添加物と従来の添加物 及び組換え体と宿主等の相違点	7
第 2. 宿主に関する事項	7
1. 分類学上の位置付け（種名（学名）・株名等）に関する事項	7
2. 病原性及び有害生理活性物質等の生産に関する事項	7
3. 寄生性及び定着性に関する事項	8
4. 病原性の外来因子（ウイルス等）に汚染されていないことに関する事項 ...	8
5. 宿主の近縁株の病原性及び有害生理活性物質の生産に関する事項	8
第 3. ベクターに関する事項	8
1. 名称及び由来に関する事項	8
2. 性質に関する事項	8
第 4. 挿入 DNA、遺伝子産物、並びに発現ベクターの構築に関する事項	9
1. 挿入 DNA の供与体に関する事項	9
2. 挿入 DNA 又は遺伝子（抗生物質耐性マーカーを含む。）及びその遺伝子産物 の性質に関する事項	9
3. 挿入遺伝子及び抗生物質耐性マーカー遺伝子の発現に関わる領域に関する事 項	11
4. ベクターへの挿入 DNA の組込方法に関する事項	11
5. 構築された発現ベクターに関する事項	11
6. DNA の宿主への導入方法に関する事項	12
7. 抗生物質耐性マーカー遺伝子の安全性に関する事項	12
第 5. 組換え体に関する事項	12
1. 宿主との差異に関する事項	12
2. 遺伝子導入に関する事項	12
第 6. 組換え体以外の製造原料及び製造器材に関する事項	13

1. 添加物の製造原料又は製造器材としての使用実績があること	13
2. 添加物の製造原料又は製造器材としての安全性について知見が得られている こと	13
第7. 遺伝子組換え添加物に関する事項.....	13
1. 諸外国における認可、食用等に関する事項.....	13
2. 組換え体の残存に関する事項.....	13
3. 製造に由来する非有効成分の安全性に関する事項	13
4. 精製方法及びその効果に関する事項.....	13
5. 含有量の変動により有害性が示唆される常成分の変動に関する事項	14
第8. 第2から第7までの事項により安全性の知見が得られていない場合に必要な 事項	14
Ⅲ. 食品健康影響評価結果	14
<参照>	15

<審議の経緯>

- 2020年4月3日 厚生労働大臣から遺伝子組換え食品等の安全性に係る食品健康影響評価について要請（厚生労働省発生食0331第20号）、関係書類の接受
- 2020年5月19日 第781回食品安全委員会（要請事項説明）
- 2020年7月16日 第201回遺伝子組換え食品等専門調査会
- 2021年3月30日 第810回食品安全委員会（報告）
- 2021年3月31日から4月29日まで 国民からの意見・情報の募集
- 2021年5月26日 遺伝子組換え食品等専門調査会座長から食品安全委員会委員長に報告

<食品安全委員会委員名簿>

佐藤 洋（委員長）
山本 茂貴（委員長代理）
川西 徹
吉田 緑
香西 みどり
堀口 逸子
吉田 充

<食品安全委員会遺伝子組換え食品等専門調査会専門委員名簿>

中島 春紫（座長）
児玉 浩明（座長代理）
安達 玲子 近藤 一成
飯島 陽子 手島 玲子
岡田 由美子 樋口 恭子
小関 良宏 山川 隆
小野 竜一 吉川 信幸
橘田 和美

要 約

「JPAN007 株を利用して生産されたヘミセルラーゼ」について、申請者提出の資料を用いて食品健康影響評価を実施した。

本添加物は、*Aspergillus niger* BO-1 株を宿主として、*Talaromyces leycettanus* CBS 398.68 株由来のヘミセルラーゼ遺伝子を導入して作製した JPAN007 株を利用して生産されたヘミセルラーゼである。本添加物は、マンナンの 1,4-β-D-マンノシド結合をエンド型で加水分解する酵素であり、インスタントコーヒー製造における生産性及び品質の向上を目的として使用される。

「遺伝子組換え微生物を利用して製造された添加物の安全性評価基準」（平成 16 年 3 月 25 日食品安全委員会決定）に基づき、挿入遺伝子の安全性、挿入遺伝子から産生されるタンパク質の毒性、アレルギー誘発性等について確認した結果、従来の添加物と比較して新たに安全性を損なうおそれのある要因は認められなかった。

したがって、「JPAN007 株を利用して生産されたヘミセルラーゼ」については、ヒトの健康を損なうおそれはないと判断した。

I. 評価対象添加物の概要

名称：JPAN007 株を利用して生産されたヘミセルラーゼ
用途：インスタントコーヒー製造時の抽出効率の向上
申請者：ノボザイムズ ジャパン株式会社
開発者：Novozymes A/S（デンマーク）

本添加物は、*Aspergillus niger* BO-1 株を宿主として、*Talaromyces leycettanus* CBS 398.68 株由来のヘミセルラーゼ遺伝子を導入して作製した JPAN007 株を利用して生産されたヘミセルラーゼ（マンナーゼ）である。本添加物は、マンナンの 1,4-β-D-マンノシド結合をエンド型で加水分解する酵素であり、インスタントコーヒー製造における生産性及び品質の向上を目的として使用される。

II. 食品健康影響評価

第 1. 安全性評価において比較対象として用いる添加物及び宿主等の性質並びに遺伝子組換え添加物及び組換え体との相違

1. 従来の添加物の性質及び用途等に関する資料

(1) 名称、基原及び有効成分

従来の添加物の名称、基原及び有効成分は、以下のとおりである。

名称：ヘミセルラーゼ（マンナーゼ）

基原：*Trichoderma reesei*

有効成分：マンナーゼ

IUB No.： EC 3. 2. 1. 78

CAS No.： 37288-54-3

(2) 製造方法

マンナーゼは、培養、ろ過、製剤化等の工程を経て製造され、生産菌は、除菌ろ過により除去される。

(3) 用途及び使用形態

マンナーゼは、インスタントコーヒー製造において、コーヒー豆からの抽出率向上等を目的として使用される。

(4) 摂取量

マンナーゼが全てのインスタントコーヒーの製造に使用され、100%最終製品中に残存すると仮定した場合の最大一日摂取量は、0.034 mg TOS (Total Organic Solids)/ kg 体重/日である（参照 1）。

2. 宿主及び導入 DNA

(1) 宿主の種名（学名）、株名等及び由来

宿主は、*A. niger* BO-1 株である。*A. niger* BO-1 株は、自然界から分離され

た *A. niger* C40-1 株に突然変異誘導を行い、グルコアミラーゼの生産性を向上し、夾雑酵素である α -1,6-トランスグルコシダーゼの生産能を欠失した株である。

(2) DNA 供与体の種名、株名又は系統名等及び由来

マンナナーゼ (*manATL*) 遺伝子の供与体は、*T. leycettanus* CBS 398.68 株である。選抜マーカーであるアセトアミダーゼ (*amdS*) 遺伝子の供与体は、*A. nidulans* Glasgow 野生株である。

(3) 挿入 DNA の性質及び導入方法

manATL 遺伝子は、*T. leycettanus* CBS 398.68 株の野生型マンナナーゼと同一のアミノ酸配列をもつマンナナーゼ (*manATL*) をコードする。*amdS* 遺伝子は、アセトアミダーゼをコードし、選抜マーカーに用いた。

manATL 遺伝子及び *amdS* 遺伝子を含む発現カセットを、インテグラーゼにより宿主ゲノムの複数の遺伝子座に導入した。

なお、生産菌の作製に当たり、あらかじめ複数遺伝子を欠失導入用ベクターを用いた相同組換えにより欠失させているが、このうちセルフクローニングに該当しない一部の遺伝子座では、ORF 検索を行い、安全性を検討した（第5-2-(2) 参照）。

3. 宿主の添加物製造への利用経験又は食経験に関する資料

A. niger は、長期にわたり食品や食品用酵素の製造に安全に使用されている。また、*A. niger* は、日本において黒麹菌として焼酎、食酢等の発酵食品の製造に広く用いられている。

4. 宿主の構成成分等に関する資料

A. niger は、オクラトキシン A 及びフモニシン B₂ を産生する可能性があるが、*A. niger* BO-1 株がオクラトキシン A 及びフモニシン B₂ を産生しないことは分析により確認されている（参照 2）。

5. 遺伝子組換え添加物の性質及び用途等に関する資料

(1) 製品名及び有効成分

本添加物の製品名及び有効成分は、以下のとおりである。

製品名：manATL

有効成分：マンナナーゼ

IUB No.：EC 3. 2. 1. 78

CAS No.：37288-54-3

(2) 製造方法

manATL は、JPAN007 株を生産菌として、従来のマンナナーゼと同様に、

培養、ろ過、製剤化等の工程を経て製造される。生産菌は、2回の除菌ろ過により分離除去される。

(3) 用途及び使用形態

manATLは、従来のマンナーゼと同様に、インスタントコーヒー製造における生産性及び品質の向上を目的とした加工助剤として使用される。

(4) 有効成分の性質及び従来の添加物との比較

manATLは、従来のマンナーゼと同様に、コーヒー豆由来のマンナンを分解する酵素である。

6. 安全性評価において検討が必要とされる遺伝子組換え添加物と従来の添加物及び組換え体と宿主等の相違点

(1) 遺伝子組換え添加物と従来の添加物

manATLと従来のマンナーゼとの相違点は、アミノ酸残基数、基原及び最適温度が異なる点である。

(2) 組換え体と宿主

JPAN007株と宿主との相違点は、JPAN007株には *manATL* 遺伝子が複数コピー導入され、マンナーゼの高生産性を獲得している点、*amdS* 遺伝子を導入している点及びマンナーゼの生産性を高めるため複数遺伝子を欠失している点である。

以上1から6までから、本添加物及び本添加物の生産菌の比較対象となり得る従来の添加物及び宿主があると判断し、以下の各事項について評価を行った。

第2. 宿主に関する事項

1. 分類学上の位置付け（種名（学名）・株名等）に関する事項

宿主は、*A. niger* BO-1株である。

2. 病原性及び有害生理活性物質等の生産に関する事項

A. niger は、病原性で問題となる菌種ではないとされており、国立感染症研究所病原体等安全管理規程におけるバイオセーフティレベル（以下「BSL」という。）1に相当する（参照3）。

A. niger は有害生理活性物質であるオクラトキシンA及びフモニシンB₂を生産する可能性があるが、*A. niger* BO-1株はこれらのマイコトキシンを生産しないことが確認されている（参照2）。

A. niger は、アレルギー性において特に問題となる菌種ではないとされているが、*A. niger*由来の酵素としてβ-キシロシダーゼ、セリンプロテアーゼ及び3-フ

イターゼ B がアレルゲンデータベース^aに登録されている。これらの酵素は吸入性アレルゲンとして報告されており、*A. niger* 由来の酵素によるとして報告されたアレルギーは、特定職種での高頻度ばく露が起因と考えられる。*A. niger* は、国内では焼酎等の製造に安全に使用されてきた経験があるが、これらの酵素を原因とするアレルギーと *A. niger* のアレルギー性との関連性を否定できないことから、リスクの低減のため、他の糸状菌と同様、本菌を扱うときには孢子が飛散しないように十分に気をつける必要がある（参照 4）。

以上のことから、適切な環境で扱われている限り、*A. niger* BO-1 株によるアレルギー誘発性の可能性は低いと考えられる。

3. 寄生性及び定着性に関する事項

A. niger には、腸管内への寄生性及び定着性の報告はない。

4. 病原性の外来因子(ウイルス等)に汚染されていないことに関する事項

A. niger には、病原性の外来因子の存在を示唆する報告はない。

5. 宿主の近縁株の病原性及び有害生理活性物質の生産に関する事項

A. niger の近縁種には、日和見感染及び気管支アレルギーの原因菌である *A. fumigatus* や、オクラトキシン産性能を有する *A. carbonarius* が知られている。

第 3. ベクターに関する事項

1. 名称及び由来に関する事項

遺伝子導入用ベクター pJPV023 の作製には、*E. coli* 由来のプラスミド pBluescript SK-が用いられた。

2. 性質に関する事項

(1) DNA の塩基数及びその塩基配列を示す事項

プラスミド pBluescript SK-の塩基数及び塩基配列は明らかになっている。

(2) 制限酵素による切断地図に関する事項

プラスミド pBluescript SK-の制限酵素による切断地図は明らかになっている。

(3) 既知の有害塩基配列を含まないことに関する事項

プラスミド pBluescript SK-の塩基配列は明らかになっており、既知の有害塩基配列は含まれていない。

(4) 薬剤耐性に関する事項

^a WHO/IUIS Allergen Nomenclature Sub-Committee 検索日：2018年6月

プラスミド pBluescript SK-には、アンピシリン耐性遺伝子が含まれている。

(5) 伝達性に関する事項

プラスミド pBluescript SK-には、伝達を可能とする塩基配列は含まれていない。

(6) 宿主依存性に関する事項

プラスミド pBluescript SK-の複製開始配列は、*E. coli* で機能する。

第4. 挿入 DNA、遺伝子産物、並びに発現ベクターの構築に関する事項

1. 挿入 DNA の供与体に関する事項

(1) 名称、由来及び分類に関する事項

manATL 遺伝子の供与体は *T. leycettanus* CBS 398.68 株、*amdS* 遺伝子の供与体は *A. nidulans* Glasgow 野生株である。

(2) 安全性に関する事項

T. leycettanus は、食経験は認められていないが、石炭ぼたから単離された耐熱菌であり(参照 5)、産業上有用な遺伝子が研究されている(参照 6)。

A. nidulans は、食経験は認められていないが、*amdS* 遺伝子は、選抜マーカーとして長年利用されてきた実績を有する。

T. leycettanus 及び *A. nidulans* はともに、国立感染症研究所病原体等安全管理規程における BSL1 に相当する(参照 3)。

2. 挿入 DNA 又は遺伝子(抗生物質耐性マーカーを含む。)及びその遺伝子産物の性質に関する事項

(1) 挿入遺伝子のクローニング若しくは合成方法に関する事項

manATL 遺伝子は、*T. leycettanus* CBS 398.68 株のゲノム DNA を鋳型として、野生型のマンナナーゼ遺伝子の分泌シグナル及びイントロンを含む配列を PCR 法で増幅して得られた。

amdS 遺伝子は、*A. nidulans* Glasgow 野生株のゲノム DNA を鋳型として、PCR 法により得られた。

(2) 塩基数及び塩基配列と制限酵素による切断地図に関する事項

挿入 DNA の塩基数、塩基配列及び制限酵素による切断地図は明らかになっている。

(3) 挿入遺伝子の機能に関する事項

① *manATL* 遺伝子

manATL 遺伝子が発現する manATL は、マンナンの 1,4-β-D-マンノシド結合をエンド型で加水分解して(1→4)-β-D-オリゴマンナンを生成する。

- a. 挿入遺伝子の供与体のアレルギー誘発性に関する知見
T. leycettanus CBS 398.68 株のアレルギー誘発性の可能性を調べるために文献検索^bを行った結果、アレルギー誘発性を示唆する報告はなかった。
- b. 遺伝子産物についてそのアレルギー誘発性に関する知見
manATL を有効成分とする酵素製剤について、アレルギー誘発性を示唆する報告はない。また、*T. leycettanus* CBS 398.68 株由来のヘミセルラーゼのアレルギー誘発性の可能性を調べるために文献検索^bを行った結果、アレルギー誘発性を示唆する報告はなかった。
- c. 遺伝子産物の物理化学的処理に対する感受性に関する知見
(a) 人工胃液に対する感受性
manATL の人工胃液中での消化性について確認するために、SDS-PAGE 分析及びウェスタンブロット分析を行った結果、両試験において、試験開始後 0.5 分以内にバンドが消失したため、分解されることが示された (参照 7)。
(b) 人工腸液に対する感受性
manATL の人工腸液中での消化性について確認するために、SDS-PAGE 分析及びウェスタンブロット分析を行った結果、試験開始後 6 時間においても分解されないことが示された (参照 7)。
(c) 加熱処理に対する感受性
manATL の加熱処理に対する感受性について確認した結果、87°C・30 分で失活することが確認された。
- d. 遺伝子産物と既知のアレルゲンとの構造相同性に関する知見
manATL と既知のアレルゲンとの構造相同性の有無を確認するために、アレルゲンデータベース^cを用いて相同性検索を行った結果、連続する 80 アミノ酸以上の配列で 35%以上の相同性を示す既知のアレルゲン及び連続する 8 アミノ酸配列が一致する既知のアレルゲンは検出されなかった (参照 8)。

② *amdS* 遺伝子

amdS 遺伝子がコードするアセトアミダーゼは、アセトアミドを加水分解する酵素であり、アセトアミドを唯一の窒素源として含む培養液中では、本遺伝子が導入された菌株のみが生育できることから、選抜マーカーとして使用された。アセトアミダーゼがアレルギー誘発性及び毒性を示す報告はない。

以上のことから総合的に判断し、manATL 及びアセトアミダーゼがアレルギー

^b PubMed、検索日：2018 年 12 月

^c ネブラスカ大学アレルゲンデータベース(FARRP version18)

誘発性を有する可能性は低いと考えられた。

3. 挿入遺伝子及び抗生物質耐性マーカー遺伝子の発現に関わる領域に関する事項

(1) プロモーターに関する事項

manATL 遺伝子のプロモーターは、*A. niger* BO-1 株由来の *na2* 遺伝子のプロモーター配列である。*amdS* 遺伝子のプロモーターは、*A. niger* BO-1 株由来の *tef1* 遺伝子のプロモーター配列である。(参照 9)。

(2) ターミネーターに関する事項

manATL 遺伝子及び *amdS* 遺伝子のターミネーターは、*A. niger* BO-1 株由来の *amg* 遺伝子のターミネーター配列である(参照 9)。

(3) その他、挿入遺伝子の発現制御に関わる塩基配列を組み込んだ場合には、その由来、性質等が明らかであること

manATL 遺伝子の転写を安定化させるため、*A. niger* BO-1 株由来の *payA* 遺伝子の 5' 側非翻訳領域 (*payA* 5'UTR 配列) を用いた。また、*manATL* 遺伝子の転写産物を安定化させ遺伝子発現量を向上させるため、Tabacco mosaic virus の coat protein 遺伝子の 3' 側非翻訳領域 (*CP* 3'UTR 配列) を用いた(参照 9)。

そのほか、インテグラーゼ認識配列 (FRT-F / FRT-F3 配列) が用いられている。

4. ベクターへの挿入 DNA の組込方法に関する事項

プラスミド pBluescriptSK- に、インテグラーゼ認識配列を両端に配した *manATL/amdS* 遺伝子断片発現カセット、インテグラーゼ遺伝子等を挿入することによって、遺伝子導入用ベクター pJPV023 を作製した。

5. 構築された発現ベクターに関する事項

(1) 塩基数及び塩基配列と制限酵素による切断地図に関する事項

遺伝子導入用ベクター pJPV023 の塩基数及び塩基配列と制限酵素による切断地図は明らかになっている(参照 9)。

(2) 原則として、最終的に構築された発現ベクターには、目的以外のタンパク質を組換え体内で発現するオープンリーディングフレームが含まれていないこと 第 5-2-(2) に記載のとおりである。

(3) 宿主に対して用いる導入方法において、意図する挿入領域が発現ベクター上で明らかであること

意図する挿入領域は、遺伝子導入用ベクター pJPV023 の FRT-F 配列から FRT-F3 配列までの遺伝子発現カセットを含む領域である。

(4) 導入しようとする発現ベクターは、目的外の遺伝子の混入がないよう純化されていること

遺伝子導入用ベクターpJPV023は、目的外の遺伝子の混入がないように純化されている。

6. DNAの宿主への導入方法に関する事項

あらかじめインテグラーゼ認識配列を導入した宿主に遺伝子導入用ベクターpJPV023を導入し、インテグラーゼの作用により、ベクター上のインテグラーゼ認識配列間にある *manATL/amdS* 遺伝子発現カセットを宿主ゲノムに挿入した。この際、*amdS* 遺伝子による選抜を行った後に、マンナナーゼ活性を指標として形質転換体を選択した。

7. 抗生物質耐性マーカー遺伝子の安全性に関する事項

遺伝子導入用ベクターpJPV023はアンピシリン耐性遺伝子を持つが、宿主の染色体には導入されない。このことは、シーケンス解析により確認されている(参照10)。

第5. 組換え体に関する事項

1. 宿主との差異に関する事項

JPAN007株は、*manATL/amdS* 遺伝子発現カセットが導入され、マンナナーゼの生産性を高めるために複数の遺伝子を欠失させている点で宿主と異なる。

2. 遺伝子導入に関する事項

(1) 制限酵素による切断地図に関する事項

各遺伝子座への *manATL/amdS* 遺伝子発現カセットの挿入を確認するためにシーケンス解析を行った結果、目的の遺伝子座に導入されていることが確認された。また、遺伝子挿入領域の各構成要素及び制限酵素切断地図は明らかになっている(参照10)。

(2) オープンリーディングフレームの有無並びにその転写及び発現の可能性に関する事項

挿入DNAと宿主ゲノムの接合部位に生じるオープンリーディングフレーム(以下「ORF」という。)の有無を確認するために、挿入DNAと5'近傍配列を含む領域及び3'近傍配列を含む領域におけるORF検索を行った。また、欠失導入用ベクターを用いた相同組換えにおいて、異種遺伝子断片の残存した複数の遺伝子座で、同様にORF検索を行った。その結果、6つの読み枠において、終止コドンから終止コドンで終結する連続する30アミノ酸以上のORFが合計1061個検出された。

これらのORFと既知のアレルゲンとの相同性の有無を確認するために、ア

レルゲンデータベース^cを用いて相同性検索を行った結果、連続する 80 アミノ酸以上の配列に対して 35%以上の相同性を示す既知のアレルゲン及び連続する 8 アミノ酸配列が一致する既知のアレルゲンは検出されなかった。さらに、これらの ORF と既知の毒性タンパク質との相同性の有無を確認するために、MvirDB データベース（参照 11）を用いて E-value<0.02 を指標として検索を行った。その結果、3 個の ORF がデータベース中のタンパク質と相同性を示したが、いずれも毒性を有するとは考え難いタンパク質であった（参照 12～17）。

第 6. 組換え体以外の製造原料及び製造器材に関する事項

1. 添加物の製造原料又は製造器材としての使用実績があること

manATL 製剤の製造原料及び製造器材は、食品用酵素の製造に安全に使用されてきた実績がある。

2. 添加物の製造原料又は製造器材としての安全性について知見が得られていること

manATL 製剤の製造原料及び製造器材は、安全に使用されてきた実績を有することから、有害性はないと考えられる。また、本製品の原料は Food Chemicals Codex (FCC) 等の規格に適合している。

第 7. 遺伝子組換え添加物に関する事項

1. 諸外国における認可、食用等に関する事項

manATL 製剤は、デンマーク及びフランスにおいて安全性審査は終了している。また、米国では GRAS リストに記載されている。

2. 組換え体の残存に関する事項

ドットプロット分析により、manATL の製剤前の酵素サンプルには組換え DNA が残存しないことが確認された（参照 18）。

3. 製造に由来する非有効成分の安全性に関する事項

manATL 製剤前の酵素サンプルは、食品衛生法の規格基準を満たしている（参照 19）。また、製造原料は食品用酵素への使用が認められた品質のものが用いられ、安全性に問題のある非有効成分が含まれるとは考えにくい。

4. 精製方法及びその効果に関する事項

manATL 製剤は、生産菌の培養物を、粗ろ過、除菌ろ過、限外ろ過等の精製工程を経ることで得られる。これらの工程において安全性に問題のある物質が混入することはないと考えられる。

^cネブラスカ大学アレルゲンデータベース(FARRP version18)

5. 含有量の変動により有害性が示唆される常成分の変動に関する事項

manATL 製剤の製造原料及び製造方法は従来の食品用酵素の製造に使用されているものと同様であり、含有量の変動により有害性が示唆される常成分の変動はないと考えられる。

第8. 第2から第7までの事項により安全性の知見が得られていない場合に必要な事項

第2から第7までの事項により安全性の知見は得られている。

Ⅲ. 食品健康影響評価結果

「JPAN007 株を利用して生産されたヘミセルラーゼ」については、「遺伝子組換え微生物を利用して製造された添加物の安全性評価基準」（平成16年3月25日食品安全委員会決定）に基づき評価した結果、ヒトの健康を損なうおそれはないと判断した。

<参照>

1. 2017. 日本のコーヒーの飲用状況. http://coffee.ajca.or.jp/wp-content/uploads/2017/06/data04_2017-06b.pdf [accessed December 10, 2018]
2. Analysis of selected strains derived from *A. niger* C40-1 for production of mycotoxins (社内文書)
3. 国立感染症研究所病原体等安全管理規程 別冊1「病原体等のBSL分類等」
4. Schuster E, Dunn-Coleman N, Frisvad JC, van Dijck PWM. On the safety of *Aspergillus niger* - a review. *Applied Microbiology and Biotechnology*, Review 2002;59(4-5):426-435.
5. Evans HC, Stolk AC. *Talaromyces leycettanus* sp.nov. *Transactions of the British Mycological Society*, Article 1971;56:45-49.
6. Wang C, Wang H, Ma R, Shi P, Niu C et al. Biochemical characterization of a novel thermophilic α -galactosidase from *Talaromyces leycettanus* JCM12802 with significant transglycosylation activity. *Journal of Bioscience and Bioengineering*, Article 2016;121:7-12.
7. Digestibility and Purity of manATL protein in a test batch for GLP toxicology study (社内文書)
8. Sequence homology of mannanase expressed by JPAN007 to allergens (社内文書)
9. 遺伝子導入ベクターpJPV023のDNA塩基配列並びに構成 (社内文書)
10. JPAN007株の遺伝子挿入部位の塩基配列 (社内文書)
11. Zhou CE, Smith J, Lam M, Zemla A, Dyer MD et al. MvirDB--a microbial database of protein toxins, virulence factors and antibiotic resistance genes for bio-defence applications. *Nucleic Acids Res* 2007;35(Database issue):D391-394
12. Ling PD, Ryon JJ, Hayward D. EBNA-2 OF HERPESVIRUS PAPIO DIVERGES SIGNIFICANTLY FROM THE TYPE-A AND TYPE-B EBNA-2 PROTEINS OF EPSTEIN-BARR-VIRUS BUT RETAINS AN EFFICIENT TRANSACTIVATION DOMAIN WITH A CONSERVED HYDROPHOBIC MOTIF. *Journal of Virology* 1993;67(6):2990-3003
13. Jiang H, Cho YG, Wang F. Structural, functional, and genetic comparisons of Epstein-Barr virus nuclear antigen 3A, 3B, and 3C homologues encoded by the rhesus lymphocryptovirus. *Journal of Virology*, Article 2000;74(13):5921-5932.
14. Lugli EB, Allen AG, Wakefield AE. A *Pneumocystis carinii* multi-gene family with homology to subtilisin-like serine proteases. *Microbiology-Uk* 1997;143:2223-2236.
15. Stevens JM, Ulrich RL, Taylor LA, Wood MW, DeShazer D et al. Actin-binding proteins from *Burkholderia mallei* and *Burkholderia thailandensis* can functionally compensate for the actin-based motility defect of a *Burkholderia pseudomallei* bimA mutant. *Journal of Bacteriology* 2005;187(22):7857-7862.
16. Welch RA, Burland V, Plunkett G, Redford P, Roesch P et al. Extensive mosaic structure revealed by the complete genome sequence of uropathogenic *Escherichia coli*. *Proc Natl Acad Sci U S A* 2002;99(26):17020-17024.

17. Shanks J, Burtnick MN, Brett PJ, Waag DM, Spurgers KB et al. Burkholderia mallei tssM encodes a putative deubiquitinase that is secreted and expressed inside infected RAW 264.7 murine macrophages. Infect Immun 2009;77(4):1636-1648.
18. The analysis of residual DNA in *** by means of dot blot hybridization (社内文書)
19. Characterization of GMM Mannanase Toxbatch *** (社内文書)

「JPN007 株を利用して生産されたヘミセルラーゼ」に係る食品健康影響評価に関する審議結果（案）についての意見・情報の募集結果について

1. 実施期間 令和3年3月31日～令和3年4月29日
2. 提出方法 インターネット、ファックス、郵送
3. 提出状況 4件
4. 意見・情報及び食品安全委員会遺伝子組換え食品等専門調査会の回答

意見・情報*	食品安全委員会遺伝子組換え食品等専門調査会の回答
<p>・どんな目的であっても、遺伝子組み換え品には反対ですが、今回のような、たかが「インスタントコーヒー製造時の抽出効率の向上」のために使うのには賛成できません。人工添加物や遺伝子組換え品に頼った食品づくりではなく、素材そのものを生かす製法に回帰してほしいものです。</p> <p>・いくら、1日当たりの摂取量が僅少とはいえ、わずか数十年程度の知見に限られている遺伝子組換え品については、中期的な影響はまだ判断できないはずです。遺伝子組換え品は、100%の安全性が断言できるまで、使用を禁止すべきです。</p> <p>・日本ではすでに400近い遺伝子組換え成分が承認されており、この数字はダントツの世界一のレベルと思われるが（違っていたら訂正ください）、これ以上増やすのはやめていただき、いったんすべての遺伝子組換え品の流入を停止いただきたい。</p>	<p>食品安全委員会は、国民の健康の保護が最も重要であるという基本的認識の下、規制等のリスク管理を行う行政機関から独立して、科学的知見に基づき客観的かつ中立公正に食品健康影響評価を行っています。この食品健康影響評価は、食品安全基本法第11条第3項に基づき、その時点において到達されている水準の科学的知見に基づいて行うこととしております。</p> <p>本添加物については、「遺伝子組換え微生物を利用して製造された添加物の安全性評価基準」（平成16年3月25日食品安全委員会決定）に基づき評価を行った結果、ヒトの健康を損なうおそれはないと判断しました。</p> <p>なお、遺伝子組換え食品等の使用に関する御意見は、リスク管理に関するものと考えられることから、厚生労働省へお伝えします。</p>
<p>たとえ、1日当たりの摂取量が僅少とはいえ、わずか数十年程度の知見に限られている遺伝子組換え品については、中期的な影響はまだ判断できないはずです。遺伝子組換え品は、100%の安全性が断言できるまで、使用を禁止すべきです。</p>	

遺伝子組み換えは、世代を越えて影響が出ることも考えられ、その長期にわたる調査もまだなされておらず、本当に安全だとは言いきれません。私たち人間の体は食べたもので作られます。遺伝子組み換え食品は不自然なものです。私はこの法案に反対します。

遺伝子組換え技術の歴史は浅く、現代の科学レベルでしかヒトへの影響はわかっていないのにも関わらず、健康を損なう恐れはないと結論していることは、疑問です。

※ 頂いた意見・情報はそのまま掲載しています。